

フ
エ
ア
な
関
係

友情結婚からのセックスストレスなのである。というのは正確ではないかもしれない。何しろ最初からセックスがゼロの暮らしたのに、結婚2年目の今になって急に「レスだよ!」と怒り出したのでは、夫が困惑するのも当然のことだ。私と夫は学生時代からの友人で、それぞれ別の恋人がいた時期もあったものの、結局お互いに一番居心地が良いという結論に達し、セックスライフ無しのまま結婚したのだ。いやでも、さらに正確に言えば、全くのゼロってわけではないんだよね……と言う私の話を聞いているのかいないのか、アレクがうつぶせになった私のお尻をもみながら、いや〜ほんといいお尻だね、僕大きいお尻好きだよ、日本ではどっちかっていうと小さいお尻をほめるじゃない? でも僕は絶対大きい方が良くと思う、こういう時だけ、自分が「純粹な日本人」じゃないからかなくて、思ったりするよね〜、って言う。その後うつぶせから両脇に手を入れて抱きおこされ、背面座位の体勢で乳首をいじられる。バストマッサージという体で。

私はこの「マッサージセラピー」に2万円払っている。性器やそのほか粘膜部分の接触は無く、サイトにも風俗ではありませんとしつついくらに書かれている。とはいえマッサージと言いつ張るにはいかにもやりすぎの、結局はほとんど前戯だ。2万払って前戯だけ買う。「セラピスト」と客は運営会社が借り上げているワンルームマンションの部屋に2人きりになるので、殺されるまでは無いかもしれないが、金を奪われるとか、無理やり挿入されるとかは普通に有り得るな、と思いつつ来た。でもアレクはどちらもせず、今のところ普通に労働している。

万が一無理に挿入される時のことを考え、私はあらかじめ避妊をしている。私の人生に意に沿わない性行為が最初に接近してきたのは19歳の時で、ほぼ初対面の「知人の友人」にタクシーに乗せられて知らない街のマンションまでつれていかれて帰る隙もなく、しかし酒を飲んだ後のその男は十分に勃起せず、手持ちの18禁ゲームの凌辱シーンをオートで流しながらどうにかしようとする屈辱的な時間が過ぎるばかりで結局未遂に終わったのだが、しようがないから一緒にお風呂入って解散にしようか、と言われるまで妊娠したらどうしよう、妊娠したらどうしよう、と本当に怖かった。それ以来私はトリキュラーを飲むようになった。夜道を歩く時も。出張先で上司に「さっき551で買った肉まん山分けしたいから、部屋に来てよ」と言われた時も。前戯を買う時も。私は「本当に最悪の」事態だけは避けることができる。男は、そういうマッサージの女性を部屋に呼ぶときに、ここまで考えているのだから。消費する側にまわってもなお、私には覚悟が必要だ。

幾多の「イケメンセラピスト」の中からアレクを選んだのは私より年上のセラピストがアレクしかいなかったからだ。しかも、身長186センチ。いいぞ。ただでさえこんな搾取行為をするのに、さらに年下だったら自分自身を許せないっていうか……、年上で身体も大きく、いざとなったら私なんか組み伏せられてしまうような……実際にうつぶせになって馬乗りになられたのだが……それくらいの手相手でない、ちょっと金でケアをかうってことに、抵抗がありすぎる。

でもハーフか。別に「ハーフ」って要素はいらないんだけどな。と私は私自身が「要素」で取捨選択していることに慄いた。「イケメン」を大前提として採用されたセラピスト達。33歳・186センチ・ハーフのアレクの写真の下には、さらに「包容力タイプ」「タメ口派」「エスコート上手」「王子感」などの要素がひしめきあっていた。いらっしやい、くつろいでね。アレクは部屋に入った私の上着を脱がせてハンガーにかけて、僕を選んでくれてうれいよ、そう言いながら両手で私の手をぎゅっと包んで、わぁ手もおっきいんですね。私は白々しく言った。

そもそも何故前戯を金で買ったかという、夫とセックスができないからだ。結婚して最初の1年は平気だったが、2年目から徐々に追い詰められてきた。私達は友人同士のまま結

婚したが、明確に「セックスをしない」という約束があったわけでもないのに、何度か誘ってみたが、普通に断られた。そこでほかに彼氏をつくってもいいか聞いたら「やっぱり俺がいるのにそれはおかしいと思う……」とNGを出された。それで息苦しさがどんどんせりあがってきて、それからは夫の様々なことに苛立って、ある夜、夫が化粧水で肌を熱心に保湿しているのを見ている時に、抱きもしなくせに何故美しくなるうとしてるんだ？ と強い怒りに突き上げられて、化粧水をとりあげて中身を全部どぼぼ洗面所に捨ててやり、何がおこっているかわからずえっ、ごめん何？ 何？ とくり返す夫に、「権利だけ奪っておい何もくれないって、フェアじゃない？」そのように私はキレた。

フェアじゃない、という言葉は夫を揺さぶったようだ。その日は気ままにそのままお互い早めの就寝となったが、次の日の朝起きたら夫が珍しく私よりも早く起きており、ソファに座り、珈琲用のお湯はすでにケトルに沸かしてあり、あからさまな話し合いのムードがつけられていた。夫は脳内リハールでもしていたのか、私が隣に座るなり一息で言った。

「昨日の話んだけど、俺の中で沙耶ちゃんとセックスするのを定期的なタスクって扱いたい。家庭を運営する上での業務っていうか。でもその代わりに俺の要望も聞いてほしい。セックスと引き換えに沙耶ちゃんはジムに行くとか、ランニングするとか運動してほしい。方法はまかせる」

「ごめん、わからないんだけど、なんでセックスと運動がつながるの？」

「え、だってもうちょっと痩せてほしいし……俺は沙耶ちゃんの要望をかなえるから、そっちも応えてほしいっていうか……こういうのなんていうの……等価交換？」

昨日私が解き放った「フェア」が威力をまして攻撃してきたのに面食らって、そこまですてセックスしてくれなくていい、とやっとの思いで言った。それはもう私が望んでいるものとはかけはなれているから。という言葉は飲み込んだ、飲み込んだ言葉は当然つたわらない。「いや、やるよ。俺もしないとけないかと思ってたから。子どものこととか考えると」

子ども？ そんな話は今してない。私は何もかもがわからなくなった。いや。嘘だ。そういう話を夫は以前もしていた。婚姻届を出しにくく日が決まったころ、丁度私達と同じ時期に結婚するという夫の友人カップルと、一緒に来た北海道旅行の夜、ホテルの部屋で唐突に言われた。もし子どもがほしくなった時のために、1回しておこうか、試しに。そう言われて私は安心した。せっかく異性の組み合わせだからといって1回もセックスせずに婚姻制度を利用するのはなんか、それがばれたときに「異常」だと周囲に思われるのではないか、夫婦として活動している中で距離感の微妙さとかから、あれこの2人セックスしてないな、と早々にばれてしまうのではないか、と恐ろしかったからだ。空港で、ニセコのゲレンデで、温泉の休憩所で、ところかまわず夫の友人は、同行の彼女の腰や肩に自然に手をまわし、私は

その自然さになんか焦り、大丈夫？ ああいうやつ私達もやらなくて平気？ と思っていたからだ。セックスは問題なくできた。問題なさすぎて逆に拍子抜けした。私は夫がセックスをしないのは、何かやむを得ない重大な問題があるのかと思っていたから。次の日同じホテルの別の部屋に泊まっていた友人カップルと朝食会場でおちあった時、はじめて私はこの旅行を楽しめる気がした。でも理由がわからないまま、セックスはその1回きりだ。友人カップルには、今年の秋に子どもが生まれる。夫がそう言っていた。そして先に述べたような理由から、私は避妊を続けていた。夫は子どもをつくる時にしか、セックスをするつもりがないのに。

「セラピー」が始まる前にいかにもたよりない紙のブラジャーとパンツを渡されて、私はそれに着替えていたが、後になってみるとそれは「ブラ、はずしてもいい？」と耳元で囁かれるサービスのためとしか思えなかった。パンツはかろうじて身体にまとわりついていたものの、ずりあげられて尻を揉まれたのでほとんど前張りみたいになっていた。90分にわたるセラピーの後、私は30分の「アフターいちやいちゃ」オプションを追加注文した。バックハグをされながら、おなかすいちやったな、と言うとアレクが、ヌードルをつくってあげよう、と言った。

「まるで彼氏のうちに遊びにきたようなアットホーム感」がコンセプトのワンルームには、1人暮らしの男性宅にありそうなものが大体あって、アレクはひとつしかないコンロで2人分の湯を沸かした。お金をはらっているのに、今この瞬間はアレクと私も家族っぽいと思う。一方で、彼が今まさにお湯をそそいでいる、あらかじめ部屋のキッチンに用意されていたカップヌードルに、何を入られてもおかしくはない。スマホを見ると30分ほど前に夫からLINEが来ている。お昼は家で食べますか？ その2分後に餃子を焼こうと思っています。と追記があった。マッサージュに行くときだけ言って家を出てきたのだ。嘘じゃない。痩せる件はちょっと考えるわ。そうも言った。これも嘘じゃない。

本当のことを言うと、私は友達に友情結婚だよね、と夫に確かめたことがない。そうだね、と言われたくなかったから。「友情結婚」をインターネットで検索すると、確かにセックスの無い結婚と書いてあるのに、私はやっぱり、それを心のどこかで認められない。婚姻届を出した日に、私達は並んで同じ家に向かって歩いて、こういう時って手をつないだりするもんじゃないの、と私がおどかしく思っていたら、あたたかい家庭をつくらうね、夫はそう言った。セックスのないあたたかい家庭が、夫には見えていたのだろう。私には見えない。

カップヌードルを食べ終わって着替えた私は、オプション料金含む2万5千円をアレクに支払った。サイトにはカード決済可と書いてあったのに、アレクは現金にこだわった。最近

なんでもカードで支払っていたから、お札の手触りってそういうえばこんな感じだったなあ、と懐かしかった。夫とのセックスも、お金で買えればいいのにと私は思った。家族になると何故だか急に、お金を払うことが許されない。

「名残おしいよ、このお尻ずっと触っていたいよ」アレクが私をハグし、お尻を揉む。アレクの着ているガウンと私の着ているセーターがこすれ合って、バチバチと静電気が音をたてる。帰ったら、私は夫と話さないといけない。本来であれば結婚する前にすべきだった話を。セックス嫌いで子どもが欲しい人間と、セックスしたくて子どもはいらぬ人間が、人間同士で話しあわないといけない。あなたが言ってる家族って、それってどういう意味だった？ 私はケアを他人から金で買った。私はこんなことをしている場合じゃないけど、夫と家族を続けるのにも必要なら、今後も続けるだろう。夫のことが好きだから。

アレクが玄関先まで私を送ってくれた。気を付けて帰って、もうすぐ雨って言ってたから。汎用性の高い気遣いが、私だけのために用意されたものではない優しさが、それでも嬉しい。また疲れたら癒されにきてね。マンションのドアを閉める間際に、耳たぶを舐めるくらいに唇を近づけて囁かれる。

「特別に教えてあげるけど、僕、本名はアルトゥールっていうんだよ」
きつと皆に教えているんだろう。